

宗
左
近

炎える母(抄)

響灘

日本美のふるさと

故郷の名



宗 左近
(1919-2006)

宗 左 近

炎える母(抄)

響灘

日本美のふるさと

故郷の名

目次

炎える母(抄)

響灘

日本美のふるさと

故郷の名

略年譜

炎える母(抄)

献辞

母よ

あなたにこの一巻を
これは

あなたが炎となつて

二十二年の

炎えやすい紙でつくつた

あなたの墓です

そして

わたしの墓です

生きながら

葬るための

墓です

炎えやまない

あなたとわたしを

もろともに
母よ

序 詞

墓

こころのなかに
肉体がない

ように

わたしのなかに

こころがない

そうして

ないこころのため
にわたしが立っている

月の光

その夜 1

たえずわたしたちはわたしたち自身の荷物を
背負つて歩いていかざるをえなかった
荷車やトラックが不足していたためだけではない
身内が遠くへ疎開していたから
そこへ運ばなければならぬいくつかの荷物に
引っぱられていつもわたしたちは歩いていた
その夜もわたしの妻子のいる福島へゆく
午後十時半上野発最後の夜行にわたしの
妻子の荷物を背負つてのりこむ母をおくるために
四谷区左門町真福寺の間借りの離れの一室を出て
信濃町の表通りの電車道を省線信濃町駅へむかつて
少し息をはずませ^いせてしかしひっそりと歩いていた
午後八時半人通りは不思議に一人もなく

灯火管制で静もりかえった両側の家並の間を

アスファルト道路は水族館の水槽のなかのように

うす明るく浮き出て流れて青白い闇だった

闇はなぜだか小刻みに呼吸していたから

月は空の真上で蓋された板ガラスの厚さから

そのぶんだけさらに浅く身をひいて薄く水をはった

手術皿の底にまぎれ落ちた銀貨みたいに光っていた

光っていたしかしそれは荷物を右肩に背負ったわたしたちの

気張った左足がすすんでゆくにつれて沈んでは

また浮かびそして沈んではまた浮かびあがっていた

魚にエラ呼吸というものがあるのと同じように

この宇宙には月呼吸というものがあるのですよ

なぜだかふいに母の理解できそうもないデタラメを

わたしは大きな声をあげてしゃべりはじめていた

福島から夜汽車にゆられて上京してすぐまた夜汽車で引っかえそうとして

わたしよりもはるかにひどく疲れているに違いない母の

しかし黙ったまま交互に強くつき出すばかりのモンペの足さきの

洗いたての白足袋のまっすぐむこうわずか
二百メートルばかりの信濃町駅が妙に遠々しかった

環状線

その夜 2

妙に遠々しい信濃町駅に白足袋がふみいったとき

空涙のかれ果てた女のやるせない叫びのような

(わたしは妻以外の女性を知らなかったのだけれど)

サイレンが湧きおこってきた向うの神宮外苑の

森の上で早くも探照灯が三つ四つ五つ夜空への

少女の放尿みたいに気恥しく光って消えた

(わたしは少女のそんなところを見たこともなかったのだけれど)

空襲警報空襲警報敵機大編隊東部上空ヨリ近接シツツアリ

ああ近接でも交換でも勝手にするがいい一昨夜の

大空襲で母とわたしは借家さえ焼かれていて十三年ぶりに

父が死ぬまでの昔の夜毎のように薄い一つ蒲団に

気恥かしくけうとくくるみあつての今日なのだ

す
籠えた老人臭と刻みタバコの匂いがわたしの洗わない

皮膚の一片下にしみこみ淀んでいる夜なのだお

鳥肌が立つ生ぬるい風が落ちる改札口の灯りが暗くなる

ふいにプラットフォームへ下る階段がずり落ちるずり落ちてはまた

螢みたいな灯かざした警防団員をのせてずりあがつてくるのぞきこめば

そこはエレヴェーターの穴みたいに暗くて深く

降りつけばプラットフォームはまた急勾配で上昇して

ありはしない向うの改札口へ吸いあげられてゆく

そんなわけではない栄養失調からくる幻覚であるにちがいない

東部軍管区司令部発表敵機大編隊帝都上空二侵入中ナリ侵入中ナリ

幻覚であるにしろなにしろ栄養失調中であるにしろなにしろ

ただ一つゆるがぬ切実となるものが大空にせまり

探照灯よりはるかに鋭い矢でわたしたちの時間に矢来をつくり

幻覚に違いないその矢来だけが闇のなかで明るいのだ

上野は交通の要点だから矢来の結節点となるだろう

それならわたしたちの乗りこむ電車は神田から山手線を外廻りで

品川經由渋谷より目白池袋線巢鴨から日暮里へ出てそこから

ぐるりくると湾曲して上野をさけて神田より

ふたたび信濃町へ帰り急勾配の階段を昇ってここへ

勝手にゆがませる環状線を完成させるに違いないおそらく

その環状線のめぐりめぐってめぐりやまない

闇に浮かびでる幻の循環電車の灯の色のともるわたしの目の闇を

のぞきこんでいたからに違いないであろう母の目は

水槽のなかから見物人を見つめすぎていた魚みたいに

大きくひれをたたんで帰口ウヨネと眩くのだ

ああとこへ帰ろうというつもりだったのだろう母よ

まことに見えない水族館の大きな水槽のなかの

ありもしない潮の環状線に乗せられておることもできず

明るいガラス壁のなかを回遊し回遊し続けてやまぬ

疲れはてた回遊魚のようにわたしたちはおのれの疲労の潮の渦にのせられて

ああとこへ帰ろうというつもりだったのだろう母よ

赤い火

その夜 3

もはやどこへも帰りつきえないだろうわたしたちに

わたしたちの背中荷物がおのれの休息所を指定したすなわち
押し返される貨車のように無造作にわたしたちは信濃町駅から

真福寺の離れの一室のふりだしに双六みたいに簡単に戻ってきたのだ

(ああサイコロはいつたい誰がなぜふっていたのだろうふっていたのだろう)

そこからは足許に崖下の木造の家並が南へ谷間をひろげる

一キロメートルのかなたに皇族の屋敷の森が大きな屏風を立てる

手前を左から右東から西へ中央線電車がスパークをあげる

昼間ならのどかな展望が今はもう朱色のプラネタリウムの夜空

風景のシルエットが田舎芝居の書割りみたいに刃こぼれしているのだが

アルマイトの翼もつ水すましの一隊のように次ぎ次ぎに

整然とおすまして左から右へすいすい流れるアメリカのB29の

透かしぼりを浮かべて廻る廻り灯籠みたいな童謡空間の

まだ消えやらぬ月の青い光に濡れている古い畳の目からは
遠い草いきれなども匂いたってくるほの暖かさなのだから

灯火管制を無視してつけたわたしの手の巻きタバコから

吸いつけてふかす母の煙管のさきの赤い火がいきづいて瞬いて

オ母サン田舎ノ田ンボノナカノ蛇ノ目ミタイニ光ツチヨルネ

ふざけかかるわたしの言葉は聞き流してなぜか母は

吐月峰^{はいがとし}の上にかがみこんだ背で夜空から赤い火を守るようにして

三度四度癇性に煙管を叩いて赤い火を吐きおとし

吐きおとしはまた新しい赤い火をいきづかせ瞬かせ

赤い火が母の身体の外に出たために縮んで小さくなった心臓でも

あるかのようにもないかのようにもどんなようにもわたしは思わず

ただ不思議に次第に速くなってくるようなこないような

わたしの心臓の鼓動のおこす波紋の行くえをそこならば追えるかもしれない

じんじんと爆弾の遠なりする彼方に凍える夜の青さにわたしは目を放っていた

待つことなどあるはずもありえない善くも悪くも何ものも

ありえないからこそ待つのだとでもいうかのように

魚のいない夜のプールのなかに落ちているウキみたいに少しふるえながら

炎の小鳥

その夜 4

プールのうえに雨がふるようになんでもなく

まことに当然みたいになんてふってきた

間近い四方がまずいきなり舞台になったかのように

青白い金属性の光の幕につつまれた気付くと

目の前の縁先の半メートルはばの庭の草の葉っぱが

一枚ずつ見事な繖形花序みたいな炎をつけて輝いている

にわかには母の影がくつきり襖の上に鋭いはさみで截ちきられ

ゆれてほおけているわたしの影に交差して強い黒さを彫む

ヤッテキヨッタナアオ母サン出ルコトニシヨウヨ

けれどもおもての内玄関前は遙かに眩しく壮観なのだ

腰までの高さの櫛の生け垣が身のたけの二倍のびわと青桐の

十数本をかかえこんで折れ曲って庭園風な小道を作っている

そのすべての葉っぱという葉っぱが灯明皿みたいに輝いて

いつせいにあかあかと若いくるめく光を噴きあげている
母とわたしは百目ローソクの林の前に始めて倉庫から
引きずり出された二体の文楽人形みたいに立ちつくした
シヤラシヤラシヤラシヤラシヤラシヤラシヤラ

思えば開幕と同時に鳴っていたに違いない軽金属音が
義太夫の出語りをあらためて見せてくれるあざやかな華やかさで
また一しきりアルマイトの小鳥の羽根を降らせてくる

あつと息をのみおえたときにはすでにわたしたちは
油脂焼夷弾の炎える花園に閉じこめられてしまっている

そのしてやられ方のあまりもの見事さが突き動かしたに違いない
数瞬後疎開荷物をとりに駆けこむ母をおしのけてわたしは

部屋にとびこんで火叩きをかつぎ出すやいなやマトイのように
垂れがちな怒りの尻尾を舞いあげ打ちふるって

舞いおちる炎の小鳥噴きあがる軽金属の花ああいま

仏壇が仏壇であり続けてきたそのことのためにだけ一氣に

おのれのすべてを発火装置に変質せしめた仏壇という劇場の
もろともに燃えあがる演技者も嫌観客も嫌そしてまた

みすみす愚劣な脚本したり、顔の演出家の指定通りも嫌
火叩きの垂れがちの怒りの尻尾を舞いあげ打ちふるって

噴きあがる軽金属の花舞いおちる炎の小鳥ああ

愛国防護在郷警備団員のあっぱれ亀鑑

わたしは油脂焼夷弾征伐に大奮戦しはじめる

いつの間にか疎開荷物を背負っている母を背後に立ちすくませたまま

金箔の仏壇

その夜 5

シヤラシヤラシヤラシヤラシヤラシヤラシヤラ

鳴りやまぬその金属音はもうわたしはその破片かけらを

見ていないにもかかわらず湧き立つ明るい炎の花を

まるで浮き浮きした楽器みたいに叩いていた

不思議に軽く酔いの廻りそうな心を打ちすえでもするかのように

わたしはむきになって火叩きを左右し上下していたのだが

左右し上下することによって逆にわたしは左右し上下されていた

思いがけずもとりのいもちみたいに粘るその油脂の炎の花は

左でやつと一つが消えるとすでに右でもう一つが花開いているのだ

シヤラシヤラシヤラシヤラシヤラシヤラシヤラ

鳴りやまぬその金属音に嘲笑けられていると気付いたとき

いつのまにか母の正面にむいていたわたしは母の頭の

黒い防空頭巾にもう一つの花が炎える花びらを散らしているのを見た

はじめて驚きと怒りがわたしのなかで爆けた爆けたと同時に

オカアサンはりあげたに違いないわたしの声をわたしは聞けなかったいきなりガオーッ凄じい光の風が右手の炎の繁みから捲きおこり

金箔の部厚い闇で母とわたしを遮ってしまったのだああ

北九州の田舎町きつてのいちばん大きいのを持っているんだと威張っていた父の位牌を呑みこんだままお通夜を朝明けまで

百目ローソクと灯油の灯の燃えさかるなかで奥深く輝いていた

派手好きの父の夢をみたして金箔のはりめぐらされている

北九州の田舎町で一番大きいかもしれない仏壇の内部にのみこまれたみたいになって黒い明るさできらめいているオカアサン

オカアサンオカアサン

シヤラシヤラシヤラシヤラ

死んだ父の位牌みたいになって動けないでいるわたしの前の
オカアサン

谷間

その夜 6

時間にすればおそらく二分とはたたなかつたであろう動けないでいる位牌みたいなわたしを突き動かしたのは横顔に吹きつける熱風であつたいやいやをするみたいにな二度ほど顔を動かしてから急にわたしは

焦げる板みたいに背中をそらして母の方へと倒れていった

ぬるぬるした手があつたカサカサの頬と南京豆に似た口臭があつたと思うがけなくわたしの身体の機械の歯車が急回転しだしたのだ火叩きの先のごつい縄をぎりぎり圧しつけて

母の防空頭巾の炎をよじり消した怒った騎士みたいに母の腕に

腕をつき通して大腿で歩き出した振り返る母に将校あがりの隣組長みたいにソナ荷物ナンゾステルンダステチマウンダ

ただけしくがなり立てた母を引き立てた熱風にあおられて

暗い方へともたれこんだ火にかりたてられる森のなかの獣みたいに

西が本堂の壁で南が離れの正面で東が隣接の墓地で北が小高い庭園で

囲まれているこの六メートル四方の空間は落下しやまない油脂の花々の奇態にも冷たい光の波が上下しているプールのなかみたいだから

かなたとこなたの暗さを溶かして炎えるガラス棒のスタレの層のゆれあい撥きあうプールのなかみたいだからつまりはプールの

四つ隈だけにしか暗いところのありえようわけはなくわたしたちの

もたれこんだところは本堂と離れの間の半メートル幅の路地なのだが

路地は二メートルばかりでおわりにたちまち断崖となり

不意にトンネルのなかでも抜け出たみたいに足もとはいきなり谷間なのだあ

谷間谷間それは警察署長税務署長消防署長町会議員などなどのテラテラ顔を

夜の食事にむかえて酔いつぶす酒の肴に盗品故意買売のわたしの父が田舎の家の

暗い土間の木の盥のなかにぶちこんでおく大ぶりの鯉のその鱗のような

生に対して数々の瞼を閉じたその数々の瞼の裏側そのものみたいな鯉の鱗のような

鉛色の屋根瓦が浅い水から濡れた背びれを出して静もっている谷間谷間

この屋根瓦の数々の鱗の下から滑りぬけて

いまさらどこへ行こうというのか見あげれば空は

パン屋の窯の底に首いれて見上げる煙突の内部のように奥深く黒ずんでいて

目をこらすならば底のかなたに青い星の一つや二つはきらめきでもくれそうな

気の杳^{とお}くなるみたいな遠々しさの光る水槽の底のこの断崖に立つてわたしは次第にゆれてくるのだ谷間に背をむけることが死に背をむけることであるかのようにしかもわたしは背後に赤く炎えたっている生に対して瞼を閉じなければならぬあの鱗を静もらせている鯉でもあるかのように

しかもいまつかみ出されてマナイタの上にのせられるのを待つことで身を浅い盥のなかでくねらせるあの鯉でもあるかのように

谷間にかたむき背後によじれながらわたしは次第に激しくゆれてくるのだ母の腕に

通した一本の腕がきつく引きよせしめつけてくるそのたびにおお谷間千の閉ざされた瞼の底から乱射する見えない赤い手裏剣を

わたしの瞼の裏にいち早く射ぬいた糸を使って

いまわたしをあやつり動かしはじめようとしている招きよせようとしているおそらくは生から死へのおお谷間

ゆらめいている鱗

その夜 7

谷間にひそむものの千の鱗が静かにゆらめきはじめている

わたしが動きだそうとして母の腕からしめつけられてたたらをふんだからではない
右手は信濃町駅へ左手は四谷駅へ真向かい
は東宮御所の森までへと左右に長く
沈んだ盥^{たらい}みたいな谷間のその盥^{たらい}の縁^{かみ}の背後が

縁だけをギザギザの黒い影絵として彫み残して一斉に赤い

トラホームみたいに炎えあがつてふいに無数の熱帯魚のように半透明に

赤いひれをふりだしたからだ泳ぎ出そうとしはじめたからだそのひれの動きを

わたしが引き戻された母の腕のなかからふたたび

逃げ出ようとしてまたたたらをふみながら見あげた

母の青い臉のふちどる白目の上にその赤いひれの動きをよりす早く速かに

見てとったからだ千の鱗がゆらめきはじめているのはああその無数の

熱帯魚のように赤いひれをふって泳ぎ出そうとし始めているものより一呼吸早く

もはやわたしは泳ぎでいたのだ谷間めがけてなぜだか誰かが

崖つぶちのそこに置き去っている木の梯子を伝つて滑るようにして

すると谷間に静もる屋根屋根の鱗はよりす早く速かに

わたしの足をいつそう滑らすためでもあるかのように足許に

仕舞い風呂のなま乾きのタイルみたいにぬれぬれと

いましも燃えあがろうという大空の下なのに狡猾にもはなだ色をして

かすかに円めた背中肉をくねらせようとしているのだからああ母よこの時

薪のはぜる匂いと湯の底に投げいれられる新鮮でないなま魚の匂いとまきの

まじりあつた臭気もつ母よあなたの五十八歳のなまましい臭気からわたしは

押しだされようとしていたのだろうかそれとも小魚のわたしは円い口をあけて

親魚のなげいれられた湯になる直前の水のなかを漂い始めている

臭気をたよりに泳ぎすすもうとしていたのだろうか母よ

崖上に半透明にゆらめきはじめている母よ

谷 底

その夜 8

駄け足になっていた

谷底だから駄け足になっていた

母を崖上から引きずりおろしたから

駄け足になっていた

細い道がここもかしこも

いち早く燃えあがろうとしている木々と家々の

炎と煙の壁のゆきどまりにぶつつかつて

母と一緒にではその壁をつき破って

かけぬけることはできないのだから

胸の動悸が駄け足になっていた

どの道じつとしているわけにはゆかないのだから

炎の燃えつきかたが駄け足となっていた

青い闇が巻き貝みたいな風となって赤く舞いあがる

赤い闇が直角に折れ曲つて炎える針の束となる

頬が痛くて喉がからからになる

足が四本の足が

手が真中の二本の手が握りあわされて三本となった手が

吹きあげてくるものから追いたてられ

吹きよせてくるものに向かつてゆかなければならないから

駈け足になっていた

おそらく加速度つけて赤くなるその赤い空の

下を走りめぐっている東京中の時間よりもどきどき加速度つけて

速い駈け足になっていたなっていた

欠けた真鍮の盥みたいな谷間の底によどむ

徐々にしか沸なつてこない空氣の湯水のなかにつかつていたから

疾走しようとしてゐるつもりでいても

駈け足になっていた

駈け足になることから駈け足で抜け出そうとして

心臓の動悸に負けまいとでもするかのように

駈け足になっていた

わたしたちの口から吐きだされて
一メートルほど前の空気にぶつつかりそこを熱くしてゆく
ぜいぜいするあえぎだけをいつしか追つて
駈け足になっていたなっていた

木梯子

その夜 9

あえいでいた

わたしと母はあえいでいた

わたしのあえぐことで

母があえいでいた

その母があえぐことで

わたしがさらにあえいでいた

そのわたしがあえぐことでもう一つさらに

母があえいでいた

あえぎがあえがせるそのことがまたあえぎを

あえがせるさらにそのことがもう一つさらに

あえぎにあえがせるそのあえぎの梯子が

形をとったかのように幾つもの横木をもつ

木梯子が一つ崖にもたれ残っている

たったそれだけのことでわたしの促した足台に
さきほどわたしたちがそれをおりてきた

おそろくおりるためだけにそこに置かれている

片道だけに使われたためにそこに置きずてにされている

七本の粗末な荒削りの横木が乱暴に渡されている

ぎしぎし音する一本の木梯子へ

駆け足しかできない身体をなげやりにあずけ

心のように激しくしなわせながら

小鳥の籠のなかの止り木がたてに置かれたみたい

孤独でもろい一本の木梯子の

一段一段を必要以上にぎしぎしきしませながら

あえぎよりも激しくぎしぎしきしませながら

背を円くして大きい防空頭巾を

消防夫みたいに勇ましく赤々と輝かしながら

母とそしてそれに引きずられるようにわたしは

駆け足の駆けやまない足どりをそのままに

駆けのぼり吸いこまれていったのだ

見えないくせにすぐそこにある崖上へ

さきほど危うくそこから滑り落ちてきた世界へ

水面に浮きあがつてこざるをえない外傷のない

もちろん針ものんでいるはずのないしかし

明らかに何ものかから吊りあげられてゆく

いち早く目は閉じた二匹の鯉みたい

おそらくあえぎのいびつな口もとから

口もと通りにいびつな見えない泡をふきあげながら

地理

その夜 10

崖下から木梯子

木梯子からお寺の離れの背中
それを左につたわって

(落ちれば崖下)

お寺の本堂の背中 of 白いブロック塀

(つかまってつかまって)

それをまた左へずりおちて

おやここはデコボコ石だらけ

なあんだ墓地じゃないか

一辺が歩いて約三十五メートル

(よそ見しないでつかまって)

(落ちれば崖下)

ゆきどまりは腰の高さのコンクリートの崖

その上の二階家から右に五軒の燃えている

家並のゆきどまりまでが残る一辺で約二十五メートル

つまり約三十五メートルと約二十五メートルの二辺をもつ

この墓地は矩形であつてそのうえ

この墓地はそれ自体が一個の巨きな墓石みたいであつて

(かんべんしてください)

崖下に背中をむけて向きあう真正面の一辺は

いまきた右手のお寺の本堂の背中中のブロック塀から

直角に向うに折れてさらに左手に

連なっている炎え立っている延長

(まだわかりにくいかもしれないけれど)

(わかってください)

この墓地は直方体

その約三十五メートルの一辺はすっかり

その約二十五メートルの一边は約五メートルだけ

崖下の谷間にのりだしている

高さ約四メートルというのは情けないがそれでも

まあ土で作った清水の舞台の晴れがましき

巨きな大昔の天皇や蘇我馬子らが自分のために
作らせた墓石そのもののような壮大な直方体

そう思つて思えないこともありえない

(あんまり悪くもない場所です)

崖下はもう火の渦の谷間

崖上のこの二辺の家並は火のびようぶ

風は空に黒いお葬式用花輪をいくつも舞いあげ

この部厚い明るい光の層のどこかから

読経のような声もひびいてくるのだから

(落ちれば崖下)

(登れば登ればさあどこでしょう)

(つかまつてつかまつて)

声を出してもその声が焦げてよじれてしまうのがおちの

炎えあがろうとする明るい無言の直方体

(それでもつかまっていってください)

怯えて瞬くことを忘れている黒い眼に

示さなくとも明るい出口のない地理が炎えてくる

それでもここはそれ自体が巨きな墓石だから

（落ちて崖下）

いずれ登れない天をめざして

あかあかとあまりにもあかあかと

ここでは地理そのものまでもが炎えたっているのだから

（ゆるしてください）

墓石

その夜 11

わたしたちの仕事はたちまち燃えつのはてくる

炎の動きを見ることだけになっていた実に

それだけになっていたから時間が水のように

流れているのであつたらしいのだけれども

時間はわたしたちを閉じこめている炎の直方体の

すべての壁にぶつかって飛沫しぶきを無数の千切れた

赤い舌の破片みたいにあげてすぐさまお湯となつて

わたしたちを喘がせ溺れさせようとするのだ実に

たちまちわたしたちの仕事は燃えつのはてくる

炎の動きを見ることだけになっていて見ることだけでは

喘がされ溺れさせられるだけになっているといふことであつて

だからああこの時間の流れに足さらわれたものたちが

五人七人十二人十六人押し流されて集まってきていて

トーチャンコワイヨーイヤダクルシイアツイヨー

ニゲタイヨーヤケルヨーオカアサーンドーシヨー

みんな隙すきのない防空服装に身をかためて黒い昆虫みたいに
肩や手をこわばらせて抱きあつてかたまっている

のだけれどももう本当にどうしようもないまったくの

時間そのものが沸たぎりつのもってくる熱湯なのだから

死そのものを冷たさのままに保っているはずの

冷蔵庫であるべき墓石のここにある二百個あまりの

おそろくそのすべてが今は受験勉強中の中学生の

二百人あまりの立っている若いペニスのように未来的に

熱くなっているに違いはなくあわたしはなぜか不意に

小学校六年生まで毎晩のように母に抱かれてはいっていた

風呂のなかで気恥かしげもなく無意識をよそおって故意に

母のあたたかみの果てにふれさせていた足のぬくもりを

いきなり腿のあたりからよみがえらせて放尿するのだすると

ズボンのなかでそれはバリバリ乾いていくではないかああ

中学生のペニスの墓石にむらがる草の茂みがいまや

唐もろこしの毛みたいに縮れまくれて赤く燃えあがり

墓石と墓石のあいだにはイクラの粒々みたいなものが揺れながら充滿し

トーチャンオカーチャンクルシイヨードーシヨーヨ

墓石と墓石のあいだに立ちすくむ人々の背中に火の粉はふりしきり

それは燃えたつ卒塔婆と次第に見分けがつかなくなり

じくじくとウミみたいなものをあふれさせる掌で母とつながりながら

わたしはにわかにくらくらと眠たくなってくるのだもはやこの墓地という

直方体のどの壁に立つ家並も部厚く濃いザボン色から

徐々に夏蜜柑色の透明度を刻みだす胸部レントゲン写真の

炎えあがる奥深い炎のゆれる水槽の壁であってそのあげる

竜巻きと竜巻きとがぶちあたって雲形定規状に伸縮する

そこらあたりからが中空となるのであろう生の牛肉の

巨大なオリーヴ油にひたって焼かれる炎の低い海

わたしは明るく目を見開いたまま眠たくなっておお

これが死ぬということなのかおれのサヨナラということなのか

こうしてここで燃えていくために生きてきた二十六年

それを導いてきたものが神でなく仏でないものであってみれば

二十六年が何であり何の意味をもっていたというのかそれを

聞いただす相手がまた神であり仏であらうわけがなく

おお炎えている現^{うつつ}よおお透明なわたしの墓よ

内部にも外部にも何もいなくものもなくひたすらに

わたしの燃えること自体がわたしの墓石であるより他はないわたしの墓よ

立ちながら次第にわたしは赤い眠りのなかに溶けてゆくのだ

墓地炎上

その夜 12

石の墓鉄の墓石の墓鉄の墓石の墓
墓はいずれも磨かれない鏡だから
磨いても過去は明るまず

磨いても未来を映すことのない
墓はいずれも磨かれない鏡だから

炎の海のただなかで

石の墓鉄の墓石の墓鉄の墓石の墓

いっせいにかたくなにゆれる

いっせいにかぐろく炎える

内部の炎えないところが炎えようとして
光を放ってその光の波の赤熱のために

ああ墓 刻まれた夜の原石 立てられた闇の塔
炎えないもので充たされることによつてのみ
透き通つてこようとする炎の死骸の結晶体

かたくなにゆれる

かぐろく炎える

炎の海にしぶきをあげる

岩礁の突端

はじけているうなっている

はじけることによつてうなっている

うなることによつてはじけている

炎の海の潮騒のかなたに

頭くいやぶられたタコみたいに

赤い足をまきつけられた白い土蔵のむれ

浮かびあがり沈みくだり漂いながれ

うねっているくるめいている

うねることによってくるめいている

くるめくことによつてうねっている

炎の海の渦潮のなかに

ひねりだされたチューブの絵具のように

どろりと溶けた飛行機が背中まるめて

垂れさがりゆっくり回転しはじめ

ああ石の墓鉄の墓石の墓鉄の墓石の墓

墓はいずれも磨きえない鏡であつて

そしていま墓はいずれも巨大な死の破片であつて

炎の海の底に炎の海以外のものを映しえない

二基の墓みたいに母とわたしは沈んでいて
白目を赤く焼きながら立っについて

ああいつせいかたくなにゆれてくる

ああいつせいにかぐろく炎えてくる

石の墓鉄の墓石の墓鉄の墓石の墓

母とわたしをいれていない母とわたしの墓

炎の海

その夜 13

走った

赤い眠りの海ぞこの

ウニみたいな黒い針が

脊椎に突き刺さったから

(お面白い激烈の電光の槍)

走った

沸っている火の波をけって

けって

走るとはずぶずぶと波のぬかるみのなかに

よろめきのめりこむ

ことではあったが

走った

部厚い炎の尻尾に頼たたかれて

走るとはさらに一つの炎の尻尾にむけて舌を

さしだし垂らすことではあったが

火のアラレのふりしきる

炎の海のただなかを

走った

ああなぜ走らなければならないのか

ああなぜクラゲみたいに漂ってはいけなの

走った

走ったから走ったのだ

さきに母が走ったのではない

さきにわたしが走ったのではない

燃えている鞭みたいなのがきびしく鳴って

走ったから走ったのだ

（ああ青い激烈の電光の槍）

走った

火の蛇

火のノレン

火の電車

火の崖崩れ

火の戦車

火のクレーン

火を火のなかに抱いて連鎖爆裂する火の玉の数珠

火の石を積みあげ重ねあわして飛散する火の城の石垣

走った

つきぬけてとびこえてかいくぐってはいつくばって

走った

炎えている

外側だけとなっているおのれのなかを

炎えている

内側だけとなっている焰のなかを

走った

外側が内側のなかを

外側も内側もなくなっているものがそのなくなっているおのれ自身のなかを

走った

どこまでも走った

焼かれながら

焦げながら

しかし実は焼きながら

焦がしながら

焼きえない焦がしえないもののなかを

つきぬけてとびこえてかいくぐってはいつくばって

走った

(おお黒い木炭の槍)

走った走った走ったどこまでも

走っている

その夜
14

走っている

火の海のなかに炎の一本道が

突堤のようにのめりでて

走っている

その一本道を炎のうえを

赤い釘みたいなのわたしが

走っている

走っている

一本道の炎が

走っているから走っている

走りやまないから走っている

わたしが

走っているから走りやまないでいる

走っている

とまっていられないから走っている

わたしの走るしたを

わたしの走るさを

焼きながら

燃やしながら

走っているものが走っている

走っている走っている

走っているものを追いぬいて

走っているものを突きぬけて

走っているものが走っている

走っている

走って

いないものは

いない

走っていないものは

走っていない

走っているものは
走って

走って

走って

いるものが

走っていない

いない

走って

いたものが

走っていない

いない

いるものが

いない

母よ

いない

母がいない

走っている 走っていた 走っている

母がいない

母よ

走っている

わたし

母よ

走っている

わたしは

走っている

走っていないで

いることができない

ずるずるずるずる

ずるずるずる

すりぬけてすりおちてすべりさつて

いったものは

あれは

あれは

すりぬけることからすりぬけて

ずりおちることからずりおちて

すべりさることからすべりさつて

いったあの熱いものは

ぬるぬるとぬるぬるとひたすらぬるぬるとしていた

あれは

わたしの掌のなかの母の掌なのか

母の掌のなかのわたしの掌なのか

走っている

あれは

なにものなのか

なにものの掌のなかのなにものなのか

走っている

ふりむいている

走っている

ふりむいている

走っている

たたらをふんでいる

赤い鉄板の上で跳ねている

跳ねながらうしろをふりかえっている

母よ

あなたは

炎の一本道の上

つぶして倒れている

夏蜜柑のような顔を

もちあげてくる

枯れた夏蜜柑の枝のような右手を
かざしてくる

その右手をわたしへむかって

押しだしてくる

突きだしてくる

わたしよ

わたしは赤い鉄板の上で跳ねている

一本の赤い釘となって跳ねている

跳ねながらすでに

走っている

跳ねている走っている

走っている跳ねている

一本道の炎の上

母よ

あなたは

つつぷして倒れている

夏蜜柑のような顔を

炎えている

枯れた夏蜜柑の枝のような右手を

炎えている

もはや

炎えている

炎の一本道

走っている

とまっていられないから走っている

跳ねている走っている跳ねている

わたしの走るしたを

わたしの走るさを

燃やしなが

焼きながら

走っているものが走っている

走っている跳ねている

走っているものを突きぬけて

走っているものを追いぬいて

走っているものが走っている

走っている

母よ

走っている

母よ

炎えている一本道

母よ

表記について

作品中には、今日の観点からすれば不適当な表現がありますが、作品の持つ文学性、芸術性及び時代背景、ならびに著者が故人であることを考慮してそのままとしました。

北九州市立文学館文庫⑧

平成26年3月28日発行

著者 宗 左近

発行 北九州市立文学館

〒803-0813 北九州市小倉北区域内 4-1

Tel (093) 571-1505

Fax (093) 571-1525

印刷 瞬報社写真印刷株式会社

1308105C

北九州市立文学館文庫

8



北九州市立
文学館

Kitakyushu
Literature Museum